

札幌大学総合論叢 第36号 (2013年12月)

〈論文〉

批判的メタファー分析のための予備研究 — 複合メタファーと遂行的メタファー —

景山弘幸

0. はじめに
1. 概念メタファーについて
2. 複合メタファーについて
3. メタファーの遂行的側面
4. 事例研究—ゆとり—
5. まとめ

0. はじめに

本稿は、「批判的メタファー分析 (critical metaphorical analysis)」を実践する際に引き合いに出される「概念メタファー (conceptual metaphor)」の取り扱いについての留意点を述べるものである。

「批判的メタファー分析」とは、Jonathan Charteris-Black (2004) がコーパス分析を活用した「概念メタファー (conceptual metaphor)」に基づく批判的言説分析の分析手法および理論化のために提示する用語である。批判的言説分析については、すでにGeorge Lakoffによる湾岸戦争、9.11後のアフガニスタン戦争、イラク戦争に関する政治的言説を分析対象とした実践が知られている (Lakoff 2002 etc.)。

Lakoffは分析の際に自身が提唱する「概念メタファー」を最大活用しているが、より十全な批判的メタファー分析を目指すには、メタファーについてのより詳細な分析とメタファーそのものの動機付けについての論考が必要と考える。前者はメタファーの仕組みを扱う認知的側面 (cognitive aspect) であり、後者はメタファーの動機付けを扱う遂行的側面 (performative aspect) である。

以下、1節では批判的メタファー分析を念頭において「概念メタファー」について概観する。2節では、複数のレトリックが絡む「複合メタファー (complex metaphor)」を見る。さらに複数のメタファーが絡む「混合メタファー (mixed metaphor)」を検討する。3節では、そもそもメタファー分析を社会言説に応用する際には「遂行的メタファー (performative metaphor)」あるいは「発話行為的メタファー (metaphor as a speech act)」という観点が重要であることと、「価値中立写像時付加物 (value neutral mapping adjunct, 以下 VNMA)」についても考慮も怠ることはできないことを論じる。4節は、事例研究として日本語の「ゆとり」という語を取り上げ、「ゆとりローン」「ゆとり教育」「ゆとり世代」「ゆとり」というフレーズを簡易分析する。5節はまとめである。

1. 概念メタファー

Lakoff & Johnson (1980) が提起した「概念メタファー (conceptual metaphor)」は、比喩研究を大きく飛躍させた。本節では、批判的メタファー分析を念頭において、谷口 (2003) に依拠しながら改めて概念メタファーを見ておこう。

1.1 文化的情報

概念メタファーは「経験」を基盤として得られるものとされる。我々は個別の文化の中では経験を積み重ねていき、結果その文化固有の情報が入り込んだ概念メタファーを作り上げていく。ARGUMENT IS WAR (議論は戦争だ) はよく知られた概念メタファーであるが、戦争の武器は英語とは異なる。

- (1) a. 意見を戦わせる。
- b. 彼の議論に降参した。
- c. 相手の弱点をつく。
- d. 相手の意見を一刀両断にする。
- e. ミッチー、サッチーを斬る。 (谷口 2003:28)

英語と同様、日本語にも ARGUMENT IS WAR (議論は戦争だ) という概念メタファーがあるので、「戦わせる」「降参した」「弱点をつく」という表現をすんなり受け入れることができる。ただし戦いにおける武器は英語と日本語で異なる。(1d,e) から分かるように

日本語では、「刀」が武器である。英語では「刀」は出てこないだろう。概念メタファーの中には文化的情報が組み込まれている場合がある。言説をつくる側からすると、意識的・無意識的に文化的情報を匂わせる部品を組み入れることが可能である。「一刀両断」「斬る」という表現から「すっきり」のような感情も誘発されるのだから、「すっきり」感を匂わせながらある言説の受容可能性を上げることができる。

1.2 経験の基本的性

Lakoff & Johnson (1980:117) では、以下の要因に関わる経験が、人間にとって最も基本的だとしている。

- (2) a. 身体（知覚・運動装置、心的能力、感情的気質など）
- b. 身体的・物理的環境との相互作用（移動、物体の操作、食物摂取など）
- c. 文化内における他者との相互作用（政治的・経済的・宗教的の制度に関して）

谷口 (op.cit.:43) が指摘するように、この中で特に「身体」に関わる要因が最も基本的とされる。身体を用いての移動、物体の操作など「身体にまつわる空間的経験」に基づく概念メタファーは我々にとって身にしみて理解できる。Lakoff & Johnson の経験基盤主義は、「身体」と「空間」を基本的な経験としているⁱ。ここでは、メタファー表現に基本的な経験に基づく「身体にまつわる空間概念」を取り入れると伝達効果が高まる可能性があることを指摘しておこう。

1.3 「既知」による「未知」の理解

メタファーは、「未知」なる物事に遭遇した時に、「既知」なる物事との類似性によって「未知」を理解させる機能を持つ。「既知」は目に見える（つまり空間的に存在する）「具体的なもの」と置き換えることが可能であり、「未知」は目に見えない（例えば時間のような「抽象的なもの」と置き換えることができる。

- (3) a. 男はオオカミだ。
- b. あの先生は鬼だ。
- c. あの子はお姫様だ。

- (4) a. # オオカミは男だ。
b. # 鬼は A 先生だ。
c. # お姫様はあの子だ。 以上, (谷口:41-2)

(3) はそれぞれ「男」「あの先生」「あの子」の未知なる面を伝えるのに、皆がよく知っている(既知の)「オオカミ」「鬼」「お姫様」を喩えに持ち出している。(4)のように「既知」のものを「未知」のもので理解することは特別な文脈がない限り無意味とされる。ただし、(3a)のような「動物メタファー」には、「男」と「オオカミ」とどちらが「具体的で既知」なのか「抽象的で未知なのか」という問題が内在している。この点については3節で触れる。批判的メタファー分析の観点からは、メタファーは基本的に「既知」で「未知」を理解させるという仕組みを持つが、その原理的な認知的側面の分析のみでは言説に託される意味合いが捉えきれない可能性があることに留意したい。

2. 複合メタファー

日常の言語現象(言説)には、メタファー、メトニミー、シネクドキ、アイロニーといったレトリックが複合的に関わっているものが多く見られる。これまでの研究で、それぞれ個々のレトリックの仕組み(認知的側面)を詳説するものは多いが、いくつかのレトリックが絡み合っている「複合メタファー (complex metaphor)ⁱⁱ」や複数のメタファーが混じり合っている「混合メタファー (mixed metaphor)」の解明はまだ始まったばかりと言えるⁱⁱⁱ。批判的メタファー分析を行う際には、複合メタファーや混合メタファーという観点を見過ごすことはできない。以下、山梨(2012:第5章)に沿って複合メタファーと混合メタファーを概観し、批判的メタファー分析の際に留意すべき点を指摘する。

2.1 複合メタファー

2.1.1 メタファーとメトニミーの融合

- (5) a. 獅子鼻と才槌頭がケンカしている。
b. 太鼓腹がジョギングしている。 (山梨:134)

「獅子鼻」「才槌頭」「太鼓腹」の中の「鼻」「頭」「腹」は身体の一部で人間全体を表すメ

トニミー表現である。同時に修飾語としてついている「獅子」「才槌」「太鼓」はいずれも「獅子のような」「才槌のような」「太鼓のような」という類似性に基づくメタファー表現である。本稿ではこれら複合メタファーの仕組み（認知的側面）については詳細には触れない^{iv}。批判的メタファー分析の際に注目しなければならないのは、(5a) で言えば、「獅子のような鼻の人間と才槌のような頭の人間がケンカしている」という言説理解に関与するいくつかの要素である。「獅子」からは「ターゲットは獅子のように強い」というサブメタファーが導出されるし、「才槌」からは「ターゲットは才槌のように硬い」というサブメタファーが導出される。これらのサブメタファーが言説理解には重要である。さらに「強いものと硬いものがケンカしている」という事態から「勝敗はなかなかつかないぞ」とか「このケンカは見ものだ」という副次的な意味合いがにじみ出てくる。(5b) においてもサブメタファー（ここではサブメトニミー）の導出が見られる。「太鼓腹といえばおデブさんである」おデブさんの属性が言語化されることで聞き手（読み手）には言語文化内の情報（例えば、おデブさんは体が重くて走るのが苦手である。）が喚起される。そして「おデブがジョギングしている」という表現から「滑稽さ」や「嘲り」が副次的意味として感じ取られる。ここでは、まずサブメタファーの関与について確認した。

2. 1. 2 シネクドキとメタファーの融合

- (6) a. 寒くなってきましたね。外には、白いモノが舞っていますよ。
 b. 我が社のクレオパトラや楊貴妃たちは営業でもトップを走っている。

(*ibid.*:139-140)

(6a) では、「白いモノ」(類) が「雪」(種) を表す、また (6b) では「クレオパトラや楊貴妃」(種) が「美しい女性」(類) を表すシネクドキが見られる。同時に (6a) では、「舞っている」は「降っている」のメタファー表現として使用されている。(6b) では、「トップを走る」は「最前線で活躍している」のメタファー表現として使用されている。さらに言えば、(6b) の言語表現全体からは「ビジネスは競争である」という概念メタファーが想起されるし、「競走においてトップを走る女性社員」は「絶世の美女」と同じように会社から見て極めて高い評価が表明されていることが読み取れる。サブメタファーとしては、「営業成績が良い女性社員は絶世の美女のように価値がある」のようなものが創発される可能性を秘めている。サブメタファーの導出あるいは創発にあつては、特に (6b) に見られる価値判断のような情意 (affection) が塗りこまれている可能性がある。(6b) では、「美女は良し」

「競争においてトップは良し」という文化的情報（価値判断）と相まって言説が理解される。ひとたび視点を替えて言語表現者（話し手、書き手）の側からすれば言外の意味（たとえば賞賛、たとえば皮肉）を意識的にも無意識的にも伝える（あるいは伝えてしまう）可能性があるのである。（6a）においては、価値判断はないかもしれないが、それでも「またこの季節がやってきましたね」という季節の移ろいに対する哀愁のような情意を「舞う」という言語表現に託すこともできないわけではない。

2.1.3 メタファーとアイロニー

(7) 俺のパンツに可愛いエクボを作ってくれたじゃねーか！

嬉しいね！事務所まできてもらおうか！ (ibid.:142)

山梨(op.cit.)の説明によれば「エクボ」は「窪み」のメタファーである。「かわいい」は「醜い」のアイロニー、「嬉しい」は「憤慨している」のアイロニーである。ここで着目したいのは、アイロニーの使用に至る言語表現者（話し手、書き手）の伝達意図（今回は対象に対するマイナスの価値判断を伴う「脅迫」）である^v。2節で見てきた「副次的意味」「言外の意味」「伝達意図」はすべて語用論でいう「遂行的意味」あるいは Austin (1962) の「発話行為 (speech act)」に登場する「発話内行為 (illocutionary act)」であることを確認しよう。

2.2 混合メタファー

複数のメタファー（狭義の「隠喩」）が関与している表現は「混合メタファー (mixed metaphor)」と呼ばれる。

(8) The content of the argument proceeds as follows. (ibid.:144)

山梨 (op.cit.) は (8) は混合メタファーの例であり、視点の一貫性が欠如しているため表現の適切性が低いとしている。(8)における複数のメタファーとは、一つに ARGUMENT IS JOURNEY, もう一つは ARGUMENT IS CONTAINER である。一つ目の概念メタファーから proceed という語の適切な解釈が生じ、二つ目の概念メタファーから content という語の適切な意味が導出される。

一方で山梨は (9) の例については混合メタファーであっても適切な表現であることを

指摘し、「同時多発的メタファー」と呼んでいる。

(9) Do not go gentle into that good night.

出典は Dylan Thomas が死にかけている父に向かって呼びかける詩の一節である^{vi}。関わっている概念メタファーは LIFE IS JOURNEY であるが、三つの見立てが関与している。「旅立つは死の世界」というサブメタファーから go という語の意味が適切に導かれ、「死は安らかに眠る世界」というサブメタファーから gentle という語の意味が、また「死は夜の世界」というサブメタファーから night という語の適切な意味が導出される。山梨は (8) の不適切性と (9) の適切性を分けるものについては今後の課題としている。本稿での関心事はサブメタファー創発の際に寄与する要素の存在である。(9) の表現で言えば, gentle, that, good がその要素である。Gentleness 自体は価値において中立 (value neutral) ある。A is gentle が「良いか悪いか」あるいは「好きか嫌い」を決めるものは言語内ではなく言語の外にある文化情報である。This と that の直示表現も価値中立である。Goodness はさすがに価値中立ではなく、価値判断そのものである。これらの語を言語化する際に言語表現者 (話し手, 書き手) は意識的または無意識的に文化的情報に基づく情意 (affection) を塗り込めつつ「安らかな死」「死は彼岸」「死は良き世界」というサブメタファーを創発し, Do not go を含む言語表現全体に遂行的意味あるいは発語内行為 (例えば, それでも生への激励) を込めることができる。

3. メタファーの遂行的側面

ここまで1節では「概念メタファー」を概観し, 2節では「複合メタファー」について取り上げた。紹介した研究はいずれもメタファーの仕組みを明らかにすることが主たる目的とされるものである。これらは, メタファーの中身は何かという「メタファーの認知的側面 (cognitive aspect of metaphor)」に焦点を当てた研究である。

本節では, メタファー研究のもう一つの側面である「メタファーの遂行的側面 (performative aspect of metaphor)」について焦点を当てる。メタファーの遂行的側面に焦点をあてるということは, すなわちメタファーのコミュニケーション上の動機付けを探ることを意味する。さらにはメタファーすることによって伝えられ得る付加物あるいは添え物的な意味について注目する。以下, 3.1節ではメタファーの遂行的側面を, また3.2節では領域間写像時に付加される添え物的意味 (value neutral mapping adjuncts) に

ついて論じる。

3.1 メタファーの遂行的側面

本節は、野澤・柴谷（2007）の論考を紹介することで、メタファーの認知的側面の複眼的理解もさることながらメタファーの遂行的側面が批判的メタファー分析にとっては極めて重要であることを述べる。

野澤・柴谷は、メタファー研究、特に概念メタファーに基づく記述・分類の抱える問題点を適確に指摘している。

しかし、一方で Lakoff & Johnson が提唱する概念領域間の写像としてのメタファー（以下、「概念領域間写像理論」）という考えは、本来はメタファー表現の基盤であるはずの概念構造をメタファーの実体と見なし、メタファー表現を概念構造の単なる反映として位置付けてしまった。その結果、概念メタファーの記述・分類が、この研究領域における中心的取り組みとなり、表現がその目的として持つ、コミュニケーション的側面が背景化されてしまったという問題を引き起こしている。
(野澤・柴谷:239)

「概念領域間写像理論」の問題点は、ターゲット概念の理解がソース概念に依存していることを前提にしている点にある。Lakoff & Johnson (1980:115) に基づくこの依存前提に固執すると (10) のような所謂「動物メタファー」表現の説明はごちないものになる。

- (10) a. Achilles is a lion.
b. Achilles is courageous.

(10a) の文に関し Lakoff & Turner (1989) の説明は以下のようになる。ターゲット概念（「アキレスの勇敢さ」）はソース概念（「ライオンの勇敢さ」）との領域間写像を通じて理解されることになる。しかし「ライオンの勇敢さ」自体が「人間の勇敢さ」というソース概念に依存したターゲット概念である。つまり「アキレスの勇敢さ」を理解するために「ライオンの勇敢さ」に思いを巡らせる（mapping）のだが、「ライオンの勇敢さ」を理解するためには「人間の勇敢さ」に思いを巡らせる（mapping）必要性を言わなければならない。2段階の写像（mapping）への言及が不可避なのである。(10b) の字義的表現が可能

であるのだから、問題とすべきは (10a) の比喩の持つ認知的側面 (2段階写像) ではなく、(10b) と比した時の表現性、つまり発話遂行的側面なのである。

つまり、概念領域間写像理論による動物メタファーの説明の不自然さは、ソース概念に対するターゲット概念の依存性という理論的仮定から生じるメタ理論的要素の結果なのである。 (ibid.:242)

野澤・柴谷 (op.cit.) は、動物メタファーのようなある種のメタファー表現によるコミュニケーションの動機はきわめて語用論的・発話行為的のものと考え^{vii}。本稿もこの考えを前提としている。

発話行為論に準じるなら、He is a wolf というメタファー表現と、He is dangerous という字義的表現は、発話行為の中でも、状況の指示の水準では、それらの機能に大きな違いはないかもしれない。しかし、状況の指示を支える概念の性質は、具体性や豊かさの点で大きく異なる。また、さらに、聞き手において喚起されたオオカミに対する警戒心や恐怖といった情動は、警告の発語内行為の遂行を容易にし、さらにヒツジがオオカミを襲う (sic^{viii}) という百科事典的知識は、オオカミに喩えられる危険な人物に対して、聞き手が抵抗せずに逃げるよう促すという発語媒介行為の遂行を後押しするのである。 (ibid.:246)

引用中に出てくる「警戒心や恐怖といった情動」「警告の発語内行為」「逃げるよう促すという発語媒介行為」に大きく注目したい。

3.2 価値中立写像時付加物

「価値中立写像時付加物 (value neutral mapping adjunct, 以下 VNMA)」とは、Barnden & Lee (2001) の用語で、Lonergan (2009) が混合メタファー (mixed metaphor) の理解に関する仮説^{ix}の中で提示する、ソース領域内推論 (source domain reasoning) の中で複合体 (complex) を形成する要素のことである。Lonergan (op.cit.) の結論を以下のようにまとめる。

・概念メタファー理論だけでは、混合メタファーが日常の発話でよく使われることと、それを有意味で首尾一貫としていると判断されるかどうか焦点を当て

ることはできない。

- ・混合メタファーの辞書 (lexicon) には, 1) 意味 (the meaning, or sense), 2) 文法形式 (the grammatical form in which it appeared), 3) 例 (an example), 4) 概念メタファー (conceptual metaphor), 5) サブメタファー (submetaphor), 6) 価値中立写像時付加物 (value neutral mapping adjunct) が含まれる。
- ・話者の態度, 信念, 価値観, 評価は発話に常に投影されていて, それらは VNMA によって構造化されている。
- ・VNMA は, ソース領域で焦点化されると抽象的な文化的見解 (abstract cultural view) に寄与する。
- ・混合メタファーは人々の価値・信念体系として理解される。
- ・情意 (affect) が特定の VNMA がサブメタファーを形成する引き金を引く。

(Loneragan:60-68)

批判的メタファー分析の際には, 混合メタファーを蔑ろにしてはいけな。むしろ混合メタファーを注意深く分析することによって, メタファー表現に組み入れられている文化的情報, 特に情意を見出せる可能性が出てくる。以下, 特に重要な要素である VNMA について見ておく。

VNMA はソース領域と関係付けられるのだが, その数に制限はなく概念メタファーの写像範囲 (the scope of the conceptual metaphor mapping) を広げることも狭めることもできる。VNMA は, ターゲット領域に対して「情動的情報 (affective information)」を与える。情動的情報には, 「価値 (value)」「感情 (feelings)」「期待 (expectations)」「潜在性 (potentials)」「文化的斟酌 (cultural allowances)」があり, これは話者の態度や価値判断といった非言語的モダリティーによって符号化 (coding) される。

(11) Don't upset the apple cart. (人の計画を覆すな)

(11) の表現は, 以下のように分析される。

概念メタファー: THE BODY IS A CONTAINER.

サブメタファー: THE MIND IS A CONTAINER.

潜在的 VNMAs: SIZE, SHAPE, ORDER-DISORDER, CHANGE-STATE,
POTENTIALS

The apple cart という「容器 (CONTAINER)」表現から、よく知られた概念メタファー (THE BODY IS A CONTAINER.) が想起される。(11) の表現が字義通り物理的な the apple cart を指していない場合に、サブメタファー (THE MIND IS A CONTAINER.) が前景化してくる。これで (2) が目に見えない抽象的・精神的な何かを伝えている解釈の準備が出来た。「容器 (CONTAINER)」にはさまざまな属性が考えられる。例えば、「大きさ (SIZE)」「かたち (SHAPE)」「秩序 (ORDER-DISORDER)」「動静 (CHANGE-STATE)」「潜在性 (POTENTIALS)」である。これらの属性は価値に関しては中立 (value neutral) である。例えば SIZE に関し「大きいから良い」か「小さいほうが良いか」は SIZE 自体が関知するものではない。(11) の表現に戻ろう。Upset という語彙選択は、「秩序 (ORDER-DISORDER)」という属性とリンクして言語化されたと考える。ORDER-DISORDER という VNMA が選択されたことで新たなサブメタファーが創発する。

新たなサブメタファー：DISTURBING THE PHYSICAL STRUCTURE IS
DISTURBING ONE'S MENTAL VIEW.

新たなサブメタファーに基づく (11) の表現の解釈が価値判断として良いことなのか悪いことなのかは、言語使用者がどのような文脈で (11) を発話するかで決まる。「りんごが秩序だって整えられている apple cart のような人の心を乱すのは、りんごがバラバラと乱れるのと同じように良くない」という文化的情報があって初めて (11) が発語内行為 (illocutionary act) として「警告」の意味合いを持ち、また聞き手がそれを理解できることになる。

- ・ VNMA are not tied to any specific metaphorical view (e.g., conceptual metaphor)
- ・ VNMA are ancillary to the conceptual metaphor and create submetaphors related to people's reasoning about the source domain.
- ・ VNMA are non-parallel adjuncts that relate tacit cultural knowledge to conceptual metaphors (ibid.:12-13)

VNMA は特定の概念メタファーに縛られてはいない。概念メタファーに付属しソース領域内の推論に関連付けられるサブメタファーを創発する。暗黙の文化的知識を概念メタ

ファーに関連付けることができる。VNMA それ自体に価値判断は内包されていないが、言語表現の発語内行為（例えば、警告）and/or 発語媒介行為（例えば、聞き手が自制して黙る）を伝達する必須要素として機能している。

言説分析に「概念メタファー」を利用する際には、VNMA という写像時創発的なサブメタファーを創発する要素を考慮する必要がある。コミュニケーションにおいて伝達される「情動」および「文化的情報」はVNMA が決定的な役割を担っているからである。

3.3 評価性を基盤とするメタファー

鍋島（2011）は、日本語のメタファーの包括的な研究において「評価性を基盤とするメタファー」について1章を充てている。要点のみ引用させていただく。

評価性というのは個人に委ねられた主観的判断であり、外部世界にあるのではなく、それを判断する人間の側にあるいわば主観的認証（情緒・感覚的意味、楠見、1992）の一部である。主観的であるがゆえに好悪などと同じような印象を与えるものは同一化されやすくなる。これが、評価性がメタファーの基盤として働きやすい一因と考えられる。（鍋島 :303）

また、なぜ評価性が重要なのかについては次のように述べている、

コミュニケーションにおいて評価性の伝達は、最重要あるいは非常に重要な要素であろう。意思伝達に重要な評価性は言語の重要な要素であり、評価性さえしっかりしていれば意図は明確になる。メタファーといった言葉のアクロバットにおいても同様である。また、評価性は社会的言説分析（批判的談話分析：CDA）においても重要な要素であり（Martin and Rose, 2003）、今後の言語分析にとってその重要性はさらに増すことが想像される。（*ibid.*）

以上、3節では社会的言説分析である批判的メタファー分析において留意すべき3点について述べた。第1点は、メタファーの仕組み（認知的側面）もさることながらメタファーの動機（遂行的側面）に留意すること。その動機とは語用論で言うところの発語内行為であり、さらに発語媒介行為が企図されている場合もありうる。第2点は、メタファーに付加的に添えられる要素（VNMA）がメタファー表現の「情意」伝達に決定的に関与して

いること。第3点は、社会的言説分析である批判的メタファー分析においては「評価性」が重要な要素であり、言説を作り出す側は意図的に言語表現の評価性をメタファー表現として入れ込むことができるし、また何らかの行為（発語媒介行為）を引き起こすことも可能である。

4. 事例研究 – ゆとり –

本格的な批判的言説分析および批判的メタファー分析に先立って本稿で取り上げたことを「ゆとり」を含む言語表現に当てはめてみる。

「ゆとり」の語源は定かではないようだ。「寛(ゆた)たり」という説もある、これが「ゆったり」となり「ゆとり」になったのかもしれない。『広辞苑』での定義は、「余裕のあること。」「窮屈でないこと。」とある。掲載例文が「ゆとりのある教育」「経済的なゆとり」である。いずれにしても「空間的に余裕がある＝窮屈でない(プラスの評価)」が中心的意義である。1.2節で述べた「基本的な経験」としての「身体にまつわる空間概念」そのものである。これはメタファー表現する際に非常に効果的に作用するはずである。この経験に基づく具体的に既知の概念から「時間的に余裕がある＝詰め込みでない」「経済的に余裕がある＝楽」「選択の幅が広い＝自由」という意義が拡張してきたものと考えられる。そしてメタファー拡張の際に本来的には価値中立の要素(広がり SIZE)がVNMAとして働き、サブメタファー(時間的余裕はゆとりである、経済的余裕はゆとりである、選択の自由はゆとりである)に社会・文化的なプラス評価(ゆとり＝プラス評価)を持たせることとなったものと推察する。

4.1 ゆとりローン

「ゆとりローン」あるいは「ゆとり返済」は1993年に住宅金融公庫が販売を開始し、私を含め多くの人がある魅力(プラスの評価性)を感じ利用した制度の名称である。ただしその後、当初5年間の「ゆとり」期間のあとには返済額が一気に上がり、かつ経済情勢の悪化により所得が上がるどころか下がり始め、「ゆとりローン」という表現は一気にマイナスの評価性を帯び、2000年に販売中止となる。

命名者：住宅金融公庫

遂行的意味：このローンの推奨

VNMA：返済額（価値中立的で返済総額は減ることはない）

サブメタファー：5年間返済額が低く抑えられるのは、経済的ゆとりである。

事後の顛末：6年目以降、さらには11年目以降は一気に返済額が上がる一方で、収入および地価の継続的上昇という前提が破綻し、このローンはマイナス評価を帯びる。

4.2 ゆとり教育

「ゆとり教育」は一般的には2002年度施行の学習指導要領に基づく教育を指す。「詰め込み」の対義語として「ゆとり」という語が使われたが、2011年の指導要領改訂において文部科学省は「詰め込みでもゆとりでもない生きる力を育む教育」を目指すとし、マスコミは「脱ゆとり教育」と称す。ゆとり教育を受けた者たちを「ゆとり世代」と呼ぶ。

命名者：日本教職員組合および文部科学省

遂行的意味：それまでの「詰め込み教育」のマイナス評価、当該指導要領の肯定

VNMA：学習量（その多寡は価値中立的）

サブメタファー：学習量を詰め込まない（＝空間的・物理的ゆとり）のは教育的ゆとり（＝良い教育）である。

事後の顛末：教育で重要なのは詰め込みでもゆとりでもない。「生きる力」を育むこと。

4.3 ゆとり（ネット上）

「ゆとり」はネット上で、能力の低い者を指す蔑称（マイナス評価）として使用されている。ゆとり教育を受けた世代の一員というメトニミーであるが、指示対象は「ゆとり世代」に限定されるわけではなく、単に「頭の悪い奴」の意味で使われている。

命名者：ネット利用者

遂行的意味：侮蔑

VNMA：能力（本来、個人の能力は価値中立的）

サブメタファー：能力の低いものは、ゆとり教育を受けたゆとり（世代）のようなものだ。

特記事項:「ゆとり」にまつわる表現に付与された価値判断(当初は「好」後に「悪」)
つまり情意(侮蔑)のみに焦点[※]。

5. まとめ

本稿では、社会言説を「批判的メタファー分析 (critical metaphorical analysis)」する際に留意しなければならない点を指摘した。実際のコミュニケーションの場で生ずる言説をメタファー分析するにはメタファーの仕組みである「メタファーの認知的側面」もさることながら、メタファーする動機付けである「メタファーの遂行的側面」が極めて重要であることを述べた。メタファーの認知的側面においても複合メタファーや混合メタファーの存在に留意し、その動機、発話行為の意味をよく勘案しなければならない。またメタファーの遂行的側面においては、写像時に付与される「価値中立写像時付加物 (value neutral mapping adjunct)」を使つてのサブメタファー創出の際に文化情報的な価値判断や好悪の感情が塗り込められていることを想定して言説分析を行うことが重要であることを述べた。

批判的メタファー分析が、Jacob Mey (2001) が言うところの「批判的語用論 (critical pragmatics)」と親和性が極めて高いことは自明である。その分析手段に使用されるメタファー分析においても、語用論的観点、発話行為的観点が不可欠であることは論を待たない。

※本研究は、JSPS 科研費 23520452 の助成を受けたものです。

Notes

- i 概念メタファーの中には経験基盤を持たないものもあることは, Grady et.al. (1996) 等で指摘されている。
- ii ここでいう「複合メタファー (complex metaphor)」は, Grady (1997) の「プライマリーメタファー (primary metaphor) がいくつか複合された「複合的 (慣例的) メタファー (complex metaphor)」とは別物である。
- iii 「複合メタファー」という時の「メタファー」は広義の「比喩」を指す。「混合メタファー」という時の「メタファー」は狭義の「隠喩」を指す。
- iv 複合メタファー, 混合メタファーの仕組み (認知的側面あるいは認知プロセス) については山梨 (2012: 第5章), 谷口 (2003: 第6章) を参照のこと。
- v さらにパラドキシカルなアイロニーの修辭的機能および「貧しく豊かな国」のような撞着語法については, 山梨 (2012: 166-167) を参照のこと。
- vi Do not go gentle into that good night,
Old age should burn and rave at close of day;
Rage, rage against the dying of the night. (Dylan Thomas, Collected Poems:159)
- vii 発話行為 (speech act) については, Austin (1962) 等を参照のこと。
- viii おそらく, 「オオカミがヒツジを襲う」の誤植。
- ix 仮説1: 混合メタファー (mixed metaphor) は混乱した思考を反映する無意味でバカげた発話である。
仮説2: 概念メタファーは認知において根本的なものなので, 混合メタファーを理解するには「多重並行ソース・ターゲット領域写像 (multiple parallel source-to-target domain mappings)」が必要となる。
仮説3: 混合メタファーの理解は, 多重並行写像によるのではなく, ソース領域の推論中に「価値中立写像時付加物 (value neutral mapping adjunct)」によって形成される複合体による。(Lonergan 2009:abstract)
- x 「ゆとり」は「ゆとり世代」のように「ゆとり+名詞」という文法形式で使われることが多い。Lonergan (2009) が指摘する「文法形式 (the grammatical form in which it appeared)」は言説分析の際に見過ごせない。「ゆとり」は何らかの価値判断を含む修飾語 (名詞の意味を変更する要素) となっている。

References

- Austin, John Langshaw (1962) *How to Do Things with Words*. 2nd ed. Oxford University Press.
- Barnden, John & Lee, Mark (2001) *Understanding Open Ended Usages of Familiar Conceptual Metaphors: An Approach and Artificial Intelligence System*. Technical Report, CSRP-01-05. The University of Birmingham.
- Charteris-Black, Jona than (2004) *Corpus Approaches to Critical Metaphor Analysis*. Palgrave Macmillan.
- Grady, Joe, Sarah Taub, and Pamela Morgan (1996) "Primitive and Compound Metaphors," *Conceptual Structure, Discourse and Language*, by Adele Goldberg, 177-187, CSLI, Stanford.
- Grady, Joe. (1997) *Foundations of Meaning: Primary Metaphors and Primary Scenes*, Ph.D. dissertation, University of California, Berkeley.
- Lakoff, George (2002) *Moral Politics: How Liberals and Conservatives Think*. University of Chicago Press.

- Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphor We Live By*.
University of Chicago Press.
- Lakoff, George & Turner, Mark (1989) *More than Cool Reason*.
University of Chicago Press.
- Lonergan, Julia Elisabeth (2009) *Understanding Mixed Metaphor and Conceptual
Metaphor Theory*. Ph.D. dissertation. UMI Dissertation Publishing.
- Mey, Jacob (2001) *Pragmatics: An Introduction*. Wiley-Blackwell.
- 鍋島弘治朗 (2011) 『日本語のメタファー』 くろしお出版.
- 野澤元・柴谷良方 (2007) 「コミュニケーションから見たメタファー その基盤と動機」
楠見孝編 『メタファー研究の最前線』 ひつじ書房.
- 谷口一美 (2003) 『認知意味論の新展開』 研究社.
- 山梨正明 (2012) 『認知意味論研究』 研究社.